

お茶うけ 第54話

くちびるに歌を持って

この夏は、アメリカ映画『タイタニック』が評判になりました。私は子供の頃に読んだ、同じような難波船の話の思い出しました。それは、船が沈んで乗客が海に投げ出された時に、若い女の人のけなげな歌声が人々の命を救ったという話で、『唇に歌を持って』という題名で『日本少国民文庫』の第12巻『心に太陽を持って』にありました。



1920年秋の霧の深い夜に、スコットランドの西の沖合で、マッケンナの乗った小型汽船は大きな定期客船と衝突して沈没しました。いきなり暗い海に投げ出されたマッケンナは、冷たい波間にただ一人浮かんで救助を待っていました。方角も分からず、救助のボートも見えませんが、だんだん心細くなりました。すると、暗闇のなかから、女の人のしっかりとした明るく美しい歌声が聞こえてきました。マッケンナが勇気づけられて歌声のする方へ泳いでいきますと、一本の大きな材木に、何人かの婦人がつかまって波間に漂っていました。美しい声で歌っていたのは、その中の一人の若い女性でした。そこで、マッケンナも一緒に、童謡や民謡を声を合わせて繰り返し歌いました。どれくらい歌っていたことでしょう。声を聞きつけた救助のボートのオールを漕ぐ音が近づいてきました。若い女性の歌声が、皆に勇気を与え、皆の命を救ったのでした。

この『心に太陽を持って』の巻頭に、本の題名にもなった「心に太陽を持って」という詩がありました。先の大戦の最後の1年半の間、中学生だった私は学徒動員で陸軍造兵廠で働いていましたが、工場が焼け落ちるなど空襲が激しくなる中で、私を勇気づけてくれたのは、「心に太陽を持って、くちびるに歌を持って、そうすりゃ、何がこようと平気じゃないか！」という呪文のような言葉でした。しかし、最近の新潮文庫版では、その詩は下記の左枠の通りで、「何がこようと平気じゃないか！」がありません。記憶違いかなと、図書館で『日本少国民文庫』版を読みましたら、右枠の通り懐かしい語句があり安心しました。

心に太陽を持って。 あらしが ふこうと、 ふぶきが こようと、 天には黒くも、 地には争いが絶えなかるうと、 いつも、心に太陽を持って。 ドイツ詩人 ツェーザル・フライシュレンによる 「心に太陽を持って」 山本有三編著 新潮文庫 P-6	心に太陽を持って 嵐が吹かうが、雪が降らうが 天には雲、 地には争ひが絶えなからうが！ 心に太陽を持って そうすりや何が来ようと平気ぢやないか！ どんな暗い日だって それが明るくしてくれる。 「心に太陽を持って」 山本有三著『日本少国民文庫』新潮社 P-2～3
---	---

新潮文庫の巻末の解説の中で、高橋健二は、上記の左枠と右枠の訳詩の違いについて、左枠の訳詩の方がフライシュレンの作詩した「心に太陽を持って」の原詩に近いけれども、山本有三は若者たちに力強く生きよと呼びかけたかったので、それを強調した右枠の訳詩になったと思われると説明しています。

「心に太陽を持ち、くちびるに歌を持つ」ことは、私たちを常に勇気づけてくれます。

最近、皇后さまの「子供の本を通しての平和 - - 子供時代の読書の思い出 - -」のお話をNHKのテレビで拝聴して非常に感動いたしました。そのなかで、皇后さまも『日本少国民文庫』の『世界名作選』などを読まれたと話されました。新潮文庫の『心に太陽を持って』は、この『日本少国民文庫』の『心に太陽を持って』の中の約75%の話を受け継ぎ、さらに新しい話を加えて構成されています。

以上

参考資料:

- 『心に太陽を持って』 山本 有三著(『日本少国民文庫』第12巻)新潮社刊
昭和10年11月5日初版発行
- 『心に太陽を持って』 山本 有三編著 新潮文庫
昭和56年6月25日初版発行